

勝ったのは、あなたでした

青森県弘前市立第三中学校

二年 小笠原 利理子

あなたは、ふと、自分の将来が不安になることはないだろうか。私が作・水野敬也氏、画・鉄拳氏の『あなたの物語』と出会ったのは、自分の将来が不安になっていたときだった。私は特に才能があるわけでもないし、優秀でもない。普通レベルの人間だ。どうせ、将来もたいした活躍もせず、人生を適当に過ごすだろう。：けれども、この本はこんな私の考え方、生き方を覆した。

描かれているのは人生のレースだ。レースには私とあなた、そして他の大勢のランナーたちが参加している。みんな必死だ。様々な障害を乗り越え、他のランナーたちと協力して道をつくり、また、ときに他のランナーを押しつけても前にすすまないと勝てない過酷な生き残りレースだ。このレースの参加者は精子だ。男性の体内から放出された二〜三億個の精子の過酷なサバイバルレースのあと、私たちは生まれた。二〜三億個の精子は広い世界を知るため必死に卵子の元へと走る。たどりついたたった一つの精子が空を、風を、花を、波の音を、星の輝きを、世界を人生を知ることができるのだ。この本は「あなたが今ここにいるのは、過酷なレースに勝ったからだ。」と語っている。このレースで脱落した多く

のランナーたちの分も世界を感じ、人生を楽しんでしつかり生きてほしいというメッセージが伝わってくる。

私はこの本に出合ってから、これまでの自分の人生、生き方について考えた。今、自分に自信がないし、将来についても不安を抱えている。このような考え方になるのは、人生を楽しんでいないからではないのか。きつとチャレンジすることを恐れている自分や、傷つくことを恐れている自分、希望をもつことを恐れている自分が私の心に存在している。人生を縛らなれないものにしてほしい。私は何に縛られているのだろうか。もつと自由に生きればいいのか。：もしかしたら、私は自分を必死に守っているのか。でも、守らないと自分を見失いそうで怖かった。考えれば考えるほどネガティブ思考になってしまふ。

もう一度、この本を読み返してみることにした。終盤にさしかかったときだった。またもや、この本は私の考え方を変えた。「誰が何と言おうと、あなたには、世界を楽しんでほしい。」という言葉が目飛び込んできたのだ。これまでの何かが吹っ切れた気がした。「誰が何と言おうと」という言葉が特にくつときた。この言葉に出合ったとき「誰が何と言おうとどう思われようとチャレンジしよう。たとえそのことで失敗しても、傷ついても、それは私が人生をしつかり生きていくという証でもあるのだ。」と自分の心に刻んだ。どんなに届かない夢を抱いて反対されたり、陰で誰にどう思われたっていい。正直なところ、夢なんて叶わなくなっていく。たとえ実現しなくても、夢を抱くこと、努力したことは「自分のちから」になるはずだ。だから、私は馬鹿みたくに大きい夢を抱いてやる。：まるで魔法をかけたみたいに見えるように考え方が変わっていく。ポジティブに

なっていく。なんだか、心がぼかぼかした。魔法の言葉は私を変えた。

私は中学になってから陸上部に入った。一年生の頃は自分で言うのもなんだが、努力家だったと思う。しかし、ある大会でその努力が報われず、とても落ち込んだ。今でも覚えている。そのとき、血の気が引いていくのが自分ではっきりとわかった。自信を失い、どうせいくら練習しても結果は出ない、速くなれないと、やけになり、練習にも身が入らなくなっていた。しかし、この言葉に出合ってから、まるで、別人のように自分が変わっている感じがした。部活動に積極的に参加し、自主練習を行った。自身で心の成長を感じたのはスランプに陥っても「次へのステップアップのチャンスだ。」と考え、自分をコントロールする気持ちが生まれたことだ。

私は伝えたい。生まれるために私と共に過酷なレースに挑戦した参加者たちに。「私は人生を楽しんでいるよ。」と。胸を張って、今なら言える気がする。

来年は高校入試という大きな壁を乗り越えなければならぬ。また、自信を失うようなこともあるかも知れない。そんなときはこの本をもう一度読んで自分を励まし、目の前の一つ一つの事柄に向き合っていくかと思う。その先に何が待っているのか、未来に行きたくて自分に聞いてみたい気がするが……。勝ったのは、あなたでした。」と、私をこの世に送り出してくれた仲間たちに、胸を張れる生き方をすることをここに誓う。